

「互見授業」による評価と「添削棚」による生徒把握を通して指導力を向上

自分で学習を進められない生徒の増加が課題という富山県立高岡高校は、進路指導部と教務部が連携し、手を掛ける指導と共に、「互見授業」で教師同士で指導を評価し合い、指導力向上に取り組む。

細かく指示しないと生徒は自分で勉強しない

創立112年の伝統を誇る富山県立高岡高校は、例年約200人が国公立大に合格する県内屈指の進学校だ。同校でも、現行課程がスタートした頃から生徒の気質の変化が目立ち始め、従来の指導を見直す必要性を強く感じるようになったと、進路指導部長の城岡朋洋先生は話す。

「生徒の潜在能力は変わっていないのですが、とにかく手を掛けないと学習しなくなりました。教師が細

かく指示をしないと、自分で学習を進められない。本校の授業に対応するだけの基礎学力が備わっていない生徒も多く、これまで通りの指導では十分な学力が付かないと危機感を強めました」

例えば、校内実力テスト実施の際の指導も変化してきたと、教務部長の大浦栄治先生は言う。

「かつては出題範囲となる参考書や問題集のページを伝えるだけで、生徒は自分で対策を進めていました。それが10年程前からは、復習すべき問題を詳細に伝えなければ対策

が出来なくなりました。今では、事前に対策用プリントを渡し、教師がテスト終了後に集めて点検までしています。ここまですると逆に生徒の自律を妨げるのではないかと懸念しつつも、あれこれと手を掛けざるを得ない状況です」

そこで、進路指導部と教務部が連携し、2003年度から新たな指導を次々と取り入れてきた。土曜日は補習を開き、また宿題とは別に週末課題を出し、更に毎日の生活記録を付けさせ、家庭学習の時間を把握して面接で指導した。生徒自ら勉強

しないのなら、勉強せざるを得ない状況をつくろうというわけだ。

生徒の目的意識を高めることも重視し、1、2年生を対象に大学の学部・学科や職業への理解を深める講座、東京大や一橋大などを見学する「大学訪問」も、この時期に始めた。

「進路指導部と教務部の果たす役割は異なりますが、『自ら学ぶ生徒を育てたい』という目標は同じです。互いに課題をぶつけ合いながら、生徒にとって効果の高い取り組みは何かを模索していきました」(城岡先生)

富山県立高岡高校

◎教育目標は、「質実剛健」「自主自律」の精神の育成。2003年度から5年間、文部科学省の「スーパーサイエンスハイスクール」の指定を受け、理数科教育に力を入れる。11年度に理数科を廃止し、「探究科学科」を設置予定。

設立 1898(明治31)年

形態 全日制/普通科・理数科/共学

生徒数 (1学年) 約280人

10年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大2人、東北大8人、東京大17人、名古屋大4人、京都大9人、大阪大26人などに計211人が合格。私立大は慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ410人が合格。

住所 〒933-8520 富山県高岡市中川園町1-1

電話 0766-22-0166

Web Site <http://www.takaoka-h.tym.ed.jp/>

「互見授業」で評価し合い、指導ノウハウの伝承を図る

同校が目指したのは、生徒の意識や行動を変えただけではない。生徒の変化に対応するためには、教師自身も変わる必要がある。生徒の実態を踏まえた授業をしようと、05年度には教務部が中心となり、教師同士が授業を見学し、評価し合う「互見



富山県立高岡高校
城岡朋洋 Shirooka Tomohiro
教職歴23年。同校に赴任して8年目。進路指導部長。「壁にぶつかった時こそチャンス」



富山県立高岡高校
大浦栄治 Oura Eiji
教職歴28年。同校に赴任して23年目。教務部長。「生徒が分からないことを考え、下位層の底上げを図る」



富山県立高岡高校
北山功臣 Kitayama Koshin
教職歴23年。同校に赴任して15年目。2学年主任。「まずは教師が元気に授業をすることが大切」



富山県立高岡高校
野村学 Nomura Manabu
教職歴6年。同校に赴任して3年目。地歴科担当。「背中で生徒に伝えられる教師になりたい」

授業」を始めた。

「授業は、生徒と教師の相互作用によって成立します。教師の要求学力を押し付けるだけでも、生徒の要求に応えるだけでも、良い授業とはいえません。良い授業を実践するために、授業を客観的に振り返ることが可能な『互見授業』は、有効な方法と考えました」（城岡先生）

「互見授業」を始めた大きな理由が、もう一つあった。当時、異動サイクルの短期化に伴ってベテラン教

図 「互見授業」に寄せられた教師の感想・意見の例

- ・先生方それぞれに工夫が見られた。自分が授業を組み立てる上で非常に参考になった
- ・内容説明の中に時々、生徒の興味・関心をくすぐる豆知識を入れて、楽しそうな授業だった。見習いたい
- ・生徒への指示が的確であり、生徒の持っている力を十分に引き出していた。是非、私も先生方の指導法を授業に取り入れていきたい
- ・担任しているクラスの他の授業での生徒の様子が分かってよかった

*学校資料を基に、教師の声を抜粋

師の異動が相次ぎ、校内に蓄積された指導ノウハウを早急に若手教師に伝える必要があった。経験豊かな教師の授業をじっくり見られる「互見授業」は、経験の乏しい教師にとって格好の研修の場となった。

「互見授業」の期間は2週間で、教師個々に他教科も含め五つほどの授業を見学する。普段通りの授業を見せ合う方が授業改善に結び付くと考え、特別な準備はせずに授業に臨む。見学した教師は、職員室での立ち話などで感想やアドバイスを授業者に伝えると共に、簡単な感想を書いて教務部に提出する。

「互見授業」の仕組みを形式的なものにしなかったことが取り組みを活性化させるポイントになったと、大浦先生は説明する。

「かつちりとした制度にすると、フォーマルな感想しか出てこない場合があります。敷居を下げ、互いに飾らずに授業を見せ合う雰囲気をつくることで、見たい授業を見て、本音で授業を評価し合えるようになったのだと思います」

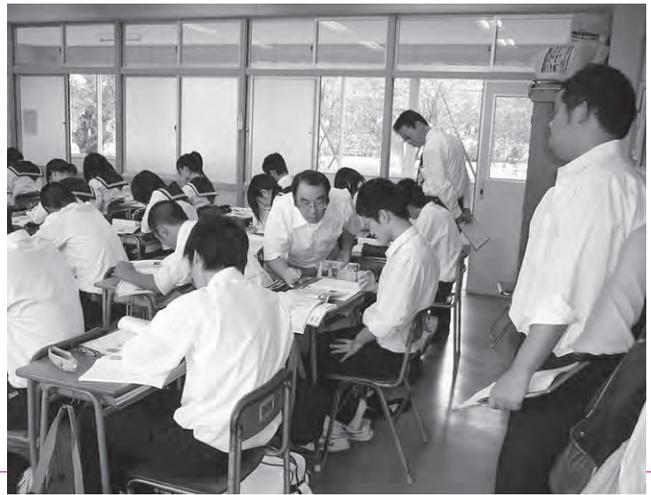
09年度までは年1回（6月）だったが、10年度は年2回（6、9月）に増やした。より多くの教師の授業や、別の単元の授業も見学できるようにするためだ。

ベテラン教師と若手教師が互いの授業から学び合う

「互見授業」をどのように授業改善に結び付けているのだろうか。

取材時に、教職歴23年の北山功臣先生による1年生の世界史Aの「互見授業」を見学した。「パクス・ブリタニカの盛衰」の内容で、第一次世界大戦を題材にして、戦争について考えさせるのが狙いだ。特に、大戦への引き金となったサラエボ事件を大きく取り上げ、もし日本で同様の事件が起きたらどうなるのかを生徒にじっくり考えさせる授業だった。北山先生は「教科書の内容だけでなく、多様な考え方を提示し、想像力を働かせて歴史を見る目を育てたい」と、世界史の授業を通して付けた力を説明する。

授業を見学した野村学先生は、次



北山先生による1年生・世界史Aの「互見授業」の様子。生徒に教えているのが北山先生。教室の後ろで見学しているのが野村先生。この日は、澤中幹夫校長も参加した

のように感想を述べた。

「北山先生の知識量と自分の知識量には圧倒的な差があり、もっと勉強しなくてはならないと痛感しました。私は、日頃から生徒の想像力をかき立て、その時代の情景が目には浮かぶような授業を目指しています。しかし、そうした授業は、豊富な知識が背景にあるからこそ実現できるものです。自分に不足している部分に気付くと共に、目指す授業の方向性を改めて確認できました」

「互見授業」では、ベテラン教師

が若手教師の授業を見ることも多い。以前、野村先生の世界史の授業を見学した北山先生は「野村先生の授業は、例えば話で授業内容を分かりやすくして生徒を引き込み、最後までテンポよく飽きさせずに進めている点が特徴です。私が見習うべきことがたくさんありました」と話す。

このように「互見授業」の良さは、教職歴や年齢にかかわらず、どの教師も学びや気付きを得られるにある。

「授業がうまくいっていないと感じた時、自分の授業だけを振り返ってどれだけ反省しても、見えてこないものがあります。どのように授業を改善すれば良いのか、その解決のヒントを得るために、他の先生の授業を見ることが有効なのだと思えます」（北山先生）

「多くの教師は30代で自分の授業スタイルを確立するものですが、同じ授業を続けるうちに次第にマンネ

リ化していきます。『互見授業』を始めた時に私は45歳でしたが、若い先生方の授業をとっても新鮮に感じました。『自分にも更なる工夫の余地がある』と考え、以前よりも授業への情熱が高まりました」（城岡先生）

他の教師から学ぶだけでなく、自分の授業を見つめ直す機会にもなるため、何げなく実践していた指導が自分の強みであることに気付き、自信を深める教師も多いという。

また、自分が指導する生徒が他の教師の授業を受けている姿を見るとは、生徒の多面的な理解につながるといふ利点もある。

「ベテラン教師ほど授業に慣れてしまえば、生徒の姿が見えなくなりがちです。『互見授業』は、自分の授業では見えない生徒の様子や、他の先生と生徒の関係を客観的に見ることがを通して、生徒理解を深められるという効果もあります」（城岡先生）

教科会と学年会が組織の縦と横をつなぐ

同校の教科担当は、学年をまたいで縦持ちをしていることも特徴の一つだ。そのため、教師全員が参加し

て教科ごとに実施する教科会も、指導改善に重要な役割を果たす。主要な議題は、日々の授業の進度・難度の調整、各学年の課題と対策などであり、教科全体として指導の系統性を保つために不可欠な場だ。頻度は教科によって異なり、数学は週1回、他教科は月1回程度実施する。

学年の教科担当によるミーティングも頻繁に行う。定期考査や実力テストの作問は、ここで話し合った基準や難易度に沿って進められる。

更に、教科会での内容は、週1回実施する学年会で共有する。「定期考査後は、各教科会で課題や対策について話し合います。その内容を学年会で発表し合うことで、校内ですべての教科の実態を共有し、進路指導などに生かすことが出来ます」（大浦先生）

教科会と学年会が、それぞれ縦と横から学校組織をつなぐ役割を果たし、組織的に指導の改善を推進している。

また、教科会と進路指導部が連携して、入試問題研究にも取り組む。毎年、旧帝大など難関大の入試問題を関連する教科の教師全員で分析

し、傾向と対策を冊子にまとめて校内で共有、分析結果を授業と作間に生かしている。

添削プリントで生徒の力を 定観測し、授業に生かす

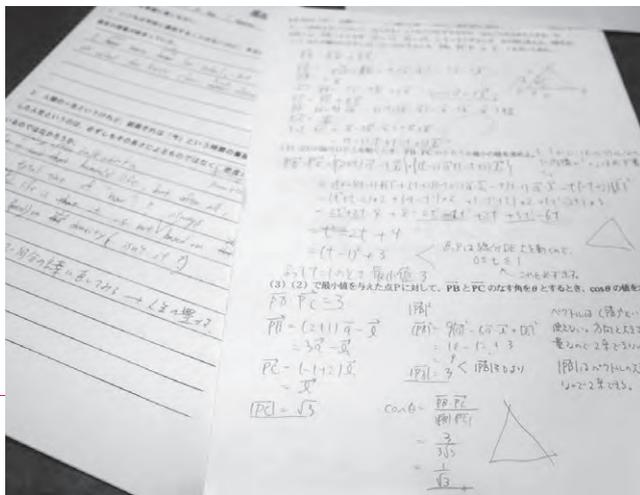
同校の伝統的な取り組みの「添削棚」は、強力な入試対策であると共に、授業改善にも生かされている。「添削棚」とは各教科の入試対策のプリント指導のことで、国語、数



職員室に設置された添削プリントの配布棚。生徒は自分のペースで希望するレベルの問題に取り組む

学、英語、理科、地歴で実施している。職員室の一角にプリントの配布・返却棚があり、生徒は希望のプリントに取り組んで担当教師に提出する。教師は原則として当日中に添削し、一人ひとりのつまずきに応じた解説を書いて返却用の添削棚に返し、生徒の質問も受け付ける。プリントは、どの教科も難易度別に用意する。例えば、数学は「実力養成」「実力定着(文・理)」の3コー

スあり、いずれも2年生の3学期に始まる。週2〜3枚のペースで棚に置かれ、その総数は入試直前までで200枚近くに上る。学習効果もさげることによって、生徒に自信を付けさせることも狙いの一つだ。「添削をやれば受かる」と多くの卒業生が合格体験記などで伝えることもあり、ほとんどの生徒が取り組み、最後までやり遂げる。入試会場にプリ



添削されたプリント。答えだけでなく、丁寧な解説を書き添えて返却する。どの教科の問題も受験対策に直結する内容だ

ントを束ねたファイルを持参する生徒もいるほどで、自信の源になっていることがうかがえる。教師の負担は大きいですが、3学年団を中心に全員体制で添削に対応している。「添削棚」はどのように授業改善に生かされるのか。「問題は、入試の傾向によって多少変えることもあります

が、基本的には毎年同じ内容です。そのため、生徒の提出率や解答の状況から、年度ごとの学力や課題を評価することが出来ます。定観測できるのも活用しています」(城岡先生)このように、他の教師からの評価や生徒の学力実態の把握を通じて、教師個々の指導力向上に取り組む同校。授業改善に向けた教師の意識も変わりつつある。

「狙い通りの良い授業が出来たと実感できるのは、年に1回くらいしかありません。あとは課題ばかりです。だからこそ、教師は常に学ぶ必要がある。そうした意識を共有できるようにになりました。学習を進めるにつれて、生徒はもっと高度なことを知りたいという欲求が強めます。その欲求に応えるためには、教師自身が教科の研究を深めていくことが不可欠です。その意味で、『教育と研究は車の両輪』だと思います。教師が研究を深めるにつれ、授業の質も高まっていくのではないのでしょうか」(城岡先生)